

# 子どもを取り巻く環境

— あかしろきいろ発達支援る一むの活動を通じて —

特定非営利活動法人 あかしろきいろ 理事長 相澤 あゆみ さん

発達障害児や家族の支援に私が携わるようになってから間もなく20年になりますが、NPO法人を設立したのは2011年です。法人設立前は、任意団体として草の根的な活動を行っており、設立と同時に「あかしろきいろ発達支援る一む」という知的障害を伴わない発達障害の児童や生徒のための療育施設を大田区池上に開設しました。

主なカリキュラムは、運動を中心としたソーシャルスキルトレーニング（社会性を身につけるための訓練）、ひとりひとりの特性に合わせた学習支援やカウンセリングなどです。運動では、脳に刺激を与える独自のプログラムを通して、意識を集中させるスキルやコミュニケーションの基本を学ばせつつ、自己肯定感や規範意識を育てていきます。学習支援では、代表的な心理検査（知能検査）であるWISCの結果に基づいて子ども本人の状況と必要な学びを見極めた上で、ひとりひとりに応じたアプローチを行っています。子どもの周囲の環境を整えるために、保護者支援（親教育）や学校との連携を行いながら、生きづらさを少しでも軽減できるよう働きかけています。保護者からの相談にはきめ細かく対応し、子育ての悩みや家族の問題を解決したり、進路相談に応じたりしながら、子どものために全力で活動しています。

発達障害児支援に長く携わっていると、今の世の中で大きく取り上げられるようになってきた様々な課題の背景に、子ども時



代の育ちや青年期の自立のタイミングでのつまづきが隠れているように感じることが多くあります。今の時代は、子どもが子どもらしく育つことが難しく、若者が若者らしく巣立つことが難しい時代なのではないかと思います。「不寛容社会」という言葉も時折聞かれますが、少しの生きづらさがきっかけとなり、子どもや若者の人生に大きな影を落とすことがあるのだと考えられます。

子育てに関して、私がいつもお母さんたちに（ときにはお父さんにも）伝え続けているのは、「自分の子どもを点数（成績など）で評価してはいけない」「親が敷いたレールを歩かせることが正解ではない」ということです。多くの親御さんは、子どもの将来のために良かれと思って一生懸命に勉強させようとしています。小さいうちは、親の喜ぶ顔が見たくて、褒められたくて、本心は嫌でも子どもたちは勉強を頑張ろうとします。しかし、親の強要が増すにつれて、また子どもが思春期にさしかかると、親の言葉に一切耳を貸さなくなる時期があります。

子ども本人が自ら「〇〇できるようになりたい」と思うようになって初めて、勉強に身が入るようになるのです。親は、「字が読めるからいい子」「九九を覚えたからいい子」「100点を取ったからいい子」「〇〇高校に合格したからいい子」という基準でわが子を評価するのではなく、子どもの努力や心優しい行いに対して「よくやったね、えらかったね」と認めてあげることが大事なのです。

テストや通知表の点数で一喜一憂して子どもを評価しようとする親は、小学校低学年の頃から学習塾などに通わせようとするのが少なくありません。しかし、自由に遊ぶ時間の中で、子どもたちは自分以外の人の好ましい関わり方を学び、身体の色々な部位を無意識のうちに鍛えながら体力を培ったりしています。学校で学んだことをしっかりと身につけることはもちろん大切ですが、学力を重視するあまり、遊ぶ時間を子どもから奪ってしまってはならないと思います。



また、特に就学前の子どもにとっては、たくさん遊ぶ経験が重要です。これは、身体的な発達の間からも明らかで、例えば椅子に座らせて運筆の練習をさせるよりも先に、体を動かして遊ぶ時間を多く作ってあげることが大切です。遊びというのは、親が高価なおもちゃを買い与えるということではなく、走る、よじ登る、跳び下りるといった大きな動きから、どんぐりや小石、木の葉などを拾って集めたりする手先を使ったものまで、日常の中にたくさん材料があります。買い物も、忙しければなかなか親子でというわけにはいかないかも知れませんが、休みの日には子どもと一緒に食材を選びながら、野菜や肉・魚について話してあげられることもできるでしょう。お金のかかる遊びではなくても、親子で触れ合った経験は、子どもにとって一生の糧になると思います。それらを通じて子どもは親との愛着関係を築き上げ、それが土台となって外の世界に出ていけるようになるのです。

発達障害の子どもと愛着障害の子どもは、表面的にはよく似た言動（問題行動）を見せることがあるのですが、問題行動の後ろには必ず原因があります。生きづらさを抱えたある子どもが発達障害の診断を受けた場合に、その周りの環境（親も含めた大人たち）が変わるだけで、子どもの状態が劇的に良い方向へと変化することがあります。子どもの行動は、その子ども自身のせいではない、ということを知ってほしいと思っています。私たちは、息苦しさを感しながら日々過ごしている子どもたちが、少しでも生きやすくなるよう支援を続けてまいりますので、ご理解いただけますことを切に願っております。

